

わが国に適したチルドレンズ・ミュージアムのあり方に関する 調査研究

日本ミュージアム・マネジメント学会 高橋 信裕

1. 調査研究目的

日本ミュージアム・マネジメント学会チルドレンズ・ミュージアム研究会(JMMA-CM研究会)では、平成17年(2005)以来、わが国の実情に結びついた日本型のチルドレンズ・ミュージアム(以下CM)を開発することを最終的な目標とする研究活動を3ヵ年計画で実施してきた。

1年目の海外における先進事例調査、2年目の国内における類似施設の実態調査を経て、3年目の今回は、これまでの国内外での調査を踏まえ、つくば市のつくばエキスポセンター環境内にCMを設置することを想定した調査研究を実施した。

2. 調査内容

今年度、CMに対する提言にいたるために実施した調査項目および手法は以下の通りである。

- つくばエキスポセンター視察調査によるベンチマーク設定
- つくば地域における子育て環境調査
 - ・行政へのアンケート調査
 - ・子育て支援施設ヒヤリング調査
 - ・つくば地域に居住する未就学児を持つ母親5名の座談会
- つくばエキスポセンターの展示装置に対する利用者の評価及び接し方に関する調査
 - ・各展示装置の類型化と調査対象サンプルの選出(現地で実際に展示を体験した印象や写真画像からの印象に基づく、複数の調査者のコメントを分析(数量化Ⅲ類))
 - ・展示装置に対する利用者の評価及び接し方に関する調査(モニター家族に対する展示場でのビデオカメラを用いた行動観察及び発話調査・展示体験後のヒヤリング調査・発話のデータ化と分析)
- その他
 - ・補足調査として、北陸地域の子ども関連施設視察(福井県子ども家族館・エンゼルランドふくい(福井県児童科学館)・金沢21世紀美術館)、米国CM文献調査を実施。

3. 調査結果

3-1. つくば地域における子育て環境の現状と課題

筑波研究学園都市であるつくば市は、昭和38年(1963)以来、日本で最初の研究学園都市として建設され、昭和60年(1985)の国際科学技術博覧会の開催を経て、現在では、産官学あわせて300を超える研究機関が集積し、約12,000人の研究者を擁する我が国最大の研究開発拠点となっている。平成17年のつくばエクスプレス(以下TX)開通により、都心との連絡機能も強化し、TX沿線地域とも連携した広域的なまちづくりも進められている。市内の交通手段では、自家用車の利用が約8割を占める車社会である。(路線バスもあるが利用率は低く、文化施設等への子ども単独の来館は難しい状況にある。)

国や民間の研究機関が集積している筑波研究学園都市は、地域全体がサイエンスをテーマとした特徴ある学習環境を形成している。科学技術週間や夏休み等には一般公開や子ども向けイベントも実施され、常設展示を有する機関も多く、日本の先進性や先端技術を見せる新しい観光資源としても位置づけられ、土日祝日にはサイエンスツアーバスと呼ばれる研究期間巡回バスが運行する。

土地柄、転勤による転入出が多く、核家族化も進行している。このため、乳幼児を持つ多くの母親たちはコミュニケーションできる場と人を求めており、市内5ヵ所に子育て支援施設が設置されている。また、外国

人居住者も増加しており、市役所におかれた支援施設には外国人の親子も訪れる。児童館は18館設置され、保護者達のボランティア活動拠点にもなっている。TX 開通に伴う沿線への移住者や、核家族・共働き世帯の増加により児童館の利用者が増加傾向にあり、放課後子供教室の開設を要求する親たちの声も多い。周辺市に比べて子育て支援は充実しているが、子育てに関する経済的な支援だけでなく、親子で安心して楽しめる場所づくりや、治安の悪化や児童数の増加を背景とした安心・安全な子どもの預かり施設等の充実が強く求められている。

3-2. つくばエキスポセンター利用者調査からの考察

つくばエキスポセンターは国際科学技術博覧会の恒久記念施設として、子ども達に科学の面白さを伝える科学館として昭和61年(1986)に設置され、運営は財団法人つくば科学万博記念財団が行なっている。ターゲットは小学生を中心とする青少年であり、多くは家族で来館する。調査対象とした1階展示場(821㎡)には深海やエネルギーに関する展示で構成されているが、センターのオリジナルの展示物は少なく、様々なテーマの参加体験型の展示装置が多数置かれている。調査では、これらの展示環境の利用者による評価とともに、親子コミュニケーションと評価との関係を分析した。概要を以下に述べる。

- 分析の結果より、展示装置群を「定理・原理」「双六型」「身体的エンターテインメント」「受動鑑賞型」「個人没頭型」「受動解説型」の6グループに分類した(分析より導き出した本研究オリジナルの分類名)。
- 人気の高い展示装置は「身体的エンターテインメント」に属するものが多い。
- 人気の高い展示装置は、展示と利用者間、利用者間のやりとりの頻度がほぼ同率の傾向がある。
- 発話の種類による分析では、「声援」「状態説明」「興味」「呼びかけ」などの種類の発話があると面白さにつながる傾向にある。つまり親など周囲の他者が利用者を応援し体験に巻き込む展開である。
- 子ども向けの展示については、子どもが楽しめると同時に、親や周囲にいる他者を、如何にその楽しさに「巻き込むか」という工夫が重要である。利用者側の立場では、保護者が、子どもを「遊ばせて」過ごすのではなく、共に楽しもうとする姿勢が必要である。また、計画者の立場では、子ども一人で淡々とそれぞれの展示装置を体験するのではなく、付き添っている保護者や周囲の子どもたちが、一緒になって関わることができる、共有意識を高める展示装置のデザインやその環境への配慮が必要となる。

4. 求められるCM像についての提言として

3年間の調査の結果に基づき、日本型のCMをつくば市(つくばエキスポセンター)に設置する場合の施設像を検証した。ここで示すのは、つくば市のみならず全国で展開されるべき同種館のモデルとしての提言である。この種の館が日本の各地で展開されることで日本型のCMが果たす意味が大きな意味を持つことになる。また、この種の館は広い地域から多くの人を集める館としてではなく、比較的小規模でも意義深い施設として展開出来るものとする。

■誰のためのCMか——子どもを中心に、親、家族、地域を育む施設

これから設置される日本のCMは、子どもだけを対象とする施設とするべきではない。子どもの育成とともに、子育ての当事者である親の教育や支援、すなわちペアレンティングが不可欠である。また、新住民や核家族世帯の多いつくば市において、人の成長の場としての地域社会を構築する意味で、子どもと家族を中心とする地域の人たちが、それぞれの役どころで生涯を通じて関わることができる、コミュニティー創造の広場という観点が求められる。

■子どもと家族の生活を変える力を持つ、豊かな学習環境を創造

現状のつくばエキスポセンターでは、親が子どもの展示体験を遠巻きに見ている状況が多く見られる。上記とも関連し、環境づくりにあたっては、子どもの過ごし方というよりは家族の過ごし方に留意するべきである。今回の調査では親子のコミュニケーションが子どもの展示体験をより豊かにすることが確かめられた。米国CMのファミリー・ラーニングの思想に習い、家族とともに過ごす時間の「質」を重視し、その後の家族の生活にも刺激を与えることを目指した、展示開発、プログラム開発並びに調査活動を行う。

■0歳から8歳の子どもを基準とした環境づくり

子どもの対象については、0歳からの乳幼児期を重点的に、子どもの環境が変わる時期とされる8歳程

度までと設定する。現代の生活環境の中で抜け落ちてしまいがちな、幼児期の成長のために必要な経験や刺激を提供するとともに、低年齢児童の専門性を強化し、他の支援との差別化をはかる。一方で、年少の子どもにとり最も身近な遊びのリーダーとなる9歳以上の年長の子どもの育成も、放課後の居場所の問題も含め、年少者とは次のステージとなる支援として設定する。年長の子どもを取り込む施策として、子ども同士の来館を促す年間パスや地域巡回バスなども検討したい。

■子育て支援の考え方

展示事業や教育普及事業とともに CM の大きな活動の柱として子育て支援事業を想定している。つくば市の子育て支援で不足している部分を補うとともに科学館ならではの経験を提供する。母親同士の交流や勉強の機会、サイエンスやアートをテーマにした親子プログラムの提供、安全な空間で子どもを遊ばせながらコーヒープレイクができる環境、母親の相談窓口機能等が考えられる。さらに、一時預かり機能、中高生時代からの親学習、児童クラブ等の活動の場を設けることも視野に入れる。

■いつでも気軽に立ち寄れる CM として

同 CM は米国でいう中規模の都市型ミュージアムをモデルとする。専業主婦、仕事を持つ母親、生活リズムが一定でなく個人差も大きい乳幼児それぞれの生活時間やニーズに対応させ、スケジュールに縛られない平日土日を含む日常利用の機能と、家族を対象にした週末の特別感のある遊びや学びの機会を設定する。館のスケジュールに利用者が合わせるのではなく、利用者のニーズに館が沿わせる、利用者中心の運営を心がける。

■サイエンスシティーにある CM として

同 CM の環境は CM の三大要素であるアート、カルチャー、サイエンスのうち、サイエンスの分野をソフトとハードの両面で充実させる。理科の学力の向上ではなく、論理的思考や問題解決能力につながる部分を育むことがねらいである。サイエンスへの出会いとなる展示体験や本格的な理科実験ができる環境のほか、つくば地域の研究機関をめぐるサイエンスツアーの起点として位置づけるための環境づくりも行なう。また、子どもの第一の導き手である母親の科学リテラシーをも育む支援も考えたい。

■「生きる力」を育むプログラム

プログラム開発を重視した運営を行なう。展示で求めることが子ども達の潜在能力を引き出し開花させることならば、プログラムはそのための水や栄養に当たる機能であり、いわゆる「生きる力」を育むことにあたる。学習目標として「コミュニケーション力」「社会力」「創造力」「探究心」の4つを設定する。なお、プログラムはその目的や内容により、子どもだけの参加、家族参加を適宜設定する。

■子どもの関心を止めない、納得するまで遊べる滞在型の空間演出

子どもは一度興味を持つと何度でも繰り返して遊び、成功するまで挑戦しようとする。また、子どもは思いつきやきまぐれを発揮して遊び、その中で自ら学びたくましく育つ。時間を気にせず、子どもだけの秘密基地遊びのように果てしなく物語を創造できる体験、ミッションに挑戦する体験、分解組立のように長時間じっくり取り組むことができる体験など、一過性ではなく長時間滞在型できることをコンセプトとした展示環境があることを特徴の一つとする。

■人を育てるチルドレンズ・ミュージアムとして

CM の成果は、そこで働くスタッフの存在やその質によるところも大きい。少ない経費で運営させるために人材の部分から削る発想は、支援の質の低下につながりかねない。スタッフの育成に力をいれるとともに、子どもと家族を中心とした様々な世代の来館動機につなげるためのプログラム事業を展開し、スタッフ一人一人が経営的視点と「もてなしの精神」で来館者に接することを自覚して事業に当たること、子どもや家族に関する学術面と福祉面での専門性を持つことが重要と考える。

■地域と連携する CM

CM は米国で親たちの活動として、ボトムアップで普及してきた施設である。本 CM を持続的な活動体としていくために、経営面の努力は前提として、子育て支援や教育支援の NPO 等の市民団体、つくば地域の研究機関の現役の方々や OB のの方々、教育機関の方々、大学機関、幼稚園や保育園、子どもに関わりたい市民等、地域の人々を巻き込み、子どもや家族の課題に協働で取り組む、地域連携の拠点の性格を持つ CM を構築する。